

まえがき

「中世」から「近世」へ、そして「幕末維新」へ

「近世」の単元の授業では、「中世」の単元の学習内容である、大名と村の百姓は単なる支配-被支配の関係ではなかったことを前提として、近世の世の中のしくみを学ばせることがポイントになる。また、近世になると戦国時代の荒々しい風潮を抑え、安全・平和な世の中への転換が進められていく中で「身分秩序」が整えられていく。そのため、そんな世の中のあり方についても生徒に考えさせるように授業づくりをおこなっている。

ところで、学習単元としての「近世」の時代区分は、教科書などとは多少ずれている。これは中世の単元のまとめを秀吉の検地・刀狩と朝鮮出兵に設定しているからだ(第②巻参照)。そして「近世」の次の単元は「近代」でもよいのだが、そうすると近代の単元の授業時数が多くなり過ぎ、その結果、単元テストの範囲も広がるため、近世と近代の間に「幕末維新」という単元を設けている。それは、内容的にも「幕末維新」期を近世から近代への過渡期ととらえ、単元としてまとまった形で学習した方が、明治新政府の政策をどう見るかという視点を確保しやすいと考えたからでもある。

「身分」をどうとらえるか

身分とは、「社会関係を構成する人間の地位の上下の序列」(『広辞苑』)をいう。つまり、身分とは人間関係の立場上の順番のことである。これを単に、封建時代の遺物だということではできない。なぜなら人間が社会生活をする場合、必ず社会集団をまとめる立場の人間が必要になるからだ。特に自然の力が圧倒的に大きかった時代においては、集団で一致した行動をとらなければ生きていくことも難しかったと思われるが、そこで人間関係は、集団の構成員とその集団をまとめる人物との2つの立場にわかれることになる。その場合、まとめる人物の立場が上になっていないと、人々はその人物についていかず、集団はまとまらなくなる。だから人間集団での立場に、上下の順番は必要になる。しかしこの順番の起源は、集団が結束するために集団の構成員が承認したルール以外にはありえず、上の役に就いた者の力の源泉は承認を与えた構成員にあるのだから、その人物が適任でない場合は構成員によって交代させられることになる。つまり、発生的には身分は固定的なものではなかったのである。

集団をまとめるとは、集団の政治をおこなうことだから、政治をおこなう人とそれ以外の人にわかれることと言ってもよい。そこで前日本史から近世までの政治をおこなう人の変遷をたどると、ムラのリーダーから豪族、大王、天皇、貴族、そして武士へと変わってきたこと、その中で政治をおこなう立場・地位が固定的な特権身分に変質したことがわかる。

「身分」をどう教えるか

身分にかんする授業で留意すべきは、「身分が高い → 偉い、人々を統治できる」と、ことからの順序を逆転させないことである。上述したように、集団のことを考え、集団をまとめることができる人物の身分が高い(立場が高い)のであり、「はじめに高き身分の人ありき」ではない。つまり、人々が為政者である人物を自分たちの社会の「公」^{おおやけ}を担う人格として承認していたからこそ、その立場(身分)が保たれていたことを確認する必要がある。これを落としてしまうと、「領主や大名が、一方的に力により領民や百姓を支配していた」と教えることになってしまう。両者の間にあるのは、そうした一方的

な支配-被支配の関係ではなく、相補的な契約に近い関係だったことを教えないと、何をしても無駄に終わるとの諦観史観を克服できない。

ところで、「身分」については、以前から「江戸時代の身分は、『士農工商』ではなく武士・百姓・町人の3つである」「百姓は農民とは同じではない」と、網野善彦氏の主張を取り入れて教えてきた。網野氏の学説を授業内容に取り入れ出したのは、民=百姓が社会全体の生産・流通を担って存在していたことをリアルにとらえるために不可欠だと考え、「人間は、力によって簡単に支配されるような弱い存在ではない」「もっとたくましく、したたかに生きてきた」ことが見えてくるようになったからである。

どうして領主や大名は年貢を取ることができたのか

時代劇における近世の日本社会は、そのほとんどが「重い年貢により苦しめられている農民」「農民から取り立てた年貢で裕福に暮らしている大名」として描かれている。そんな姿を見せられ続けると、農民は貧しく苦しかったというイメージが刷り込まれてしまう。しかし、「それほど重い年貢に苦しめられていたのなら、そこから逃げ出せばいいのではないか」「百姓は、どうして自分たちを苦しめる年貢を納め続けたのか」などの疑問が出てくる(このような発想や疑問は、中学生でさえ出してくる)。

この問題を解くカギも、近世の大名と村の百姓の関係にあり、この両者の関係が「一方的な支配-被支配の関係ではなく、相補的な契約関係だった」ことが理解できないと解けない。実際のところ、強制力だけで年貢を継続的に取り立てることなど不可能なのである。もし、「強制力で年貢を取り立てていた」と教えるのであれば、それは「人間は強制すれば、簡単に従わせることができる存在だ」と教えていることになる。そうすると、一揆はもちろん自由民権運動やレジスタンスなどの抵抗運動を教える意味などなくなってしまうのではないだろうか。

百姓が年貢を納め続けた理由は、百姓の側に「年貢を納めることは当然」という意識があったからだ。こうした意識がなければ、百姓が年貢を出し続けることはあり得ない。力で押さえつけられ支配されていたことで百姓が年貢を納めていたのであれば、そんなことが長く続くはずはない。なぜなら、それほど年貢の負担が重過ぎるのであれば、百姓はその村から逃れればよいからだ。しかし、そんな逃散が一般化しなかったのは、百姓に「公」を支える意識があったからである。つまり、年貢を負担することは、百姓にしてみれば一種のステータスだった。大名の方は、そうした百姓の立場意識に応じて年貢を取っていたのである。

ただ「公」とは、本来は百姓の所属する社会(=村)のことなのだから、その社会の外に存在している領主や大名は、本当の意味では百姓の公にはなり得ない。にもかかわらず、領主や大名は、百姓に公としての立場を認められていたことで公として存在できていた。だから、その立場を存続させるためには、年貢を受け取る側(大名など)は、百姓の立場をきちんと保障しなければならなかった。

逆に言えば、領主や大名が百姓の(村)存続をきちんと保障していたからこそ、百姓は年貢を出していたのである。このことは、「年貢を出せるのは百姓が所属する社会(=村)で一人前と認められた者であり、年貢を出すことは一人前の人間としての義務だった」とも言える。

百姓の側には「公に対して年貢を出すことは当然である」という意識があった。一方、公の立場に立つ者(大名など)は、年貢を出す百姓の立場を保障しなければならなかった。両者の間には、こうした契約の観念があった。だからその契約が守られなかった場合(破られた場合)には、一揆が起きた。「公の立場にいる者が、私利私欲のために年貢を使うとは何事だ」「それは契約違反だ」となったからだった。もっとも、そうして起こされた一揆であっても、「年貢を出すことを拒否する」「年貢制を廃棄せよ」などの要求は出ていない。ここにも領主や大名を自分たちの公として認めていた百姓の意識があらわれていた。

こうした領主と村の百姓の関係は古代まで遡ることができる。このことを踏まえると、幕末維新の単

元で「前近代から近代への過渡期に、日本の在り方がどのように変わったのか」「そのように変えていった明治新政府の政策は、本当によかったのか」などの視点が出てくる。またこのことは、近現代史の授業を考えていくときの大きな視点にもなっていく。

なお、江戸時代の身分秩序については、教科書では相変わらず江戸時代の初期のこととして書かれている。その結果、身分秩序についての授業は、江戸時代のはじめにおこなうことになる。しかしこれでは、はじめから「身分秩序による強制ありき」との認識を生徒に持たせてしまう。したがって、身分秩序についての授業は近世の単元の後半に位置づけている。

〈 米将軍吉宗のなげき 〉の授業より

大名と百姓の関係について、授業〈 米将軍吉宗のなげき 〉の討論の場面を紹介する。ただ、この授業は7月の午後ということもあり、生徒の集中は鈍く活発な討論にはなっていない。しかし、そうした状況でも授業をするわけだから、あえてこうした授業も紹介してみたい。ただそれでも、生徒の意見プリント(64ページ)を読んでも、授業中に出された意見をもとに自分の考えを深めていたことはわかる。

『世の中がうまくいかないのは「百姓のせいだ」と(吉宗は)言っているが、そのとおりなのか、そんなことはないのか、班ではなしあい!』

班でのなしあいでは、最初に全員が立ち上がり、その後意見を言った生徒から座っていく。そのため一番早く全員の生徒が座った1班を、一番早くはなしあいが終わった班であろうとの指摘をして指名をした(これは、教師が机間巡視で1班のはなしあいがきちんとできていたわけではないことをつかんでいたため、あえておこなった指名であった)。

「1班は、そのとおり(百姓のせい)だと思います。百姓は出かせぎに行くなどして収入を増やして、贅沢をしていたから、百姓が悪いと思います」『百姓が贅沢をするから、百姓が悪いんだと。それでいいですね?』という教師の説明と確認に対して、「はい」という声があがる中、2班だけ反応がなかったため2班を指名する。『「はい」じゃなかった2班、どうぞ!』

「吉宗が米の値段を上げたり下げたりしたので、それで世の中が上手くいかなかったから、悪いのは百姓じゃないと思います」『で、いいですか?』との教師の確認に、4班が反対の意思表示をしたため指名する。

「百姓が法令などをきちんと守らないことに(政治が上手くいかない)原因があるから、やっぱり百姓が悪いと思います」『法令を守らない百姓が悪いんですか?』と驚いた言い方で発問をしながら、急に3班を指名した。すると「それに百姓が・・・えっ、どういうことですか?」と、生徒は意見を言い始めたが、4班の意見の内容がわからなくなり質問をしてきた。そこで再び4班を指名した。

そして4班からの「百姓が幕府などの決まりを守らないで自分勝手にするから、世の中が上手くいかないということです」との意見を聞いて、「そんなら賛成です。百姓は御触書なんかが出ているのに、それを守っていなかったで(百姓が)悪い」との意見を述べた。

出される意見が、「そのとおり(百姓が悪い)」という流れになってきたため、教師が板書内容を指し示しながら授業の流れを遡り確認し、分家の禁止や新田開発が何故おこなわれたのか考えると、本当に百姓が悪いのだろうか、百姓としては生きていくためにはそうせざるを得なかったのではないだろうかと投げかけた。すると生徒からは、「どっちだか、わからなくなった」などの声があがった。ここで再び班でのなしあいに戻してもよかったが、これ以上は生徒の集中が続かないだろうと判断したことで、授業の残り時間が少なくなっていた関係で、生徒各自に意見プリントを書かせて授業を終えた。